

水と土の文化創造都市
市民プロジェクト2016

想像しよう——海にかかる橋を
金時鐘の長篇詩集「新潟」をめぐって

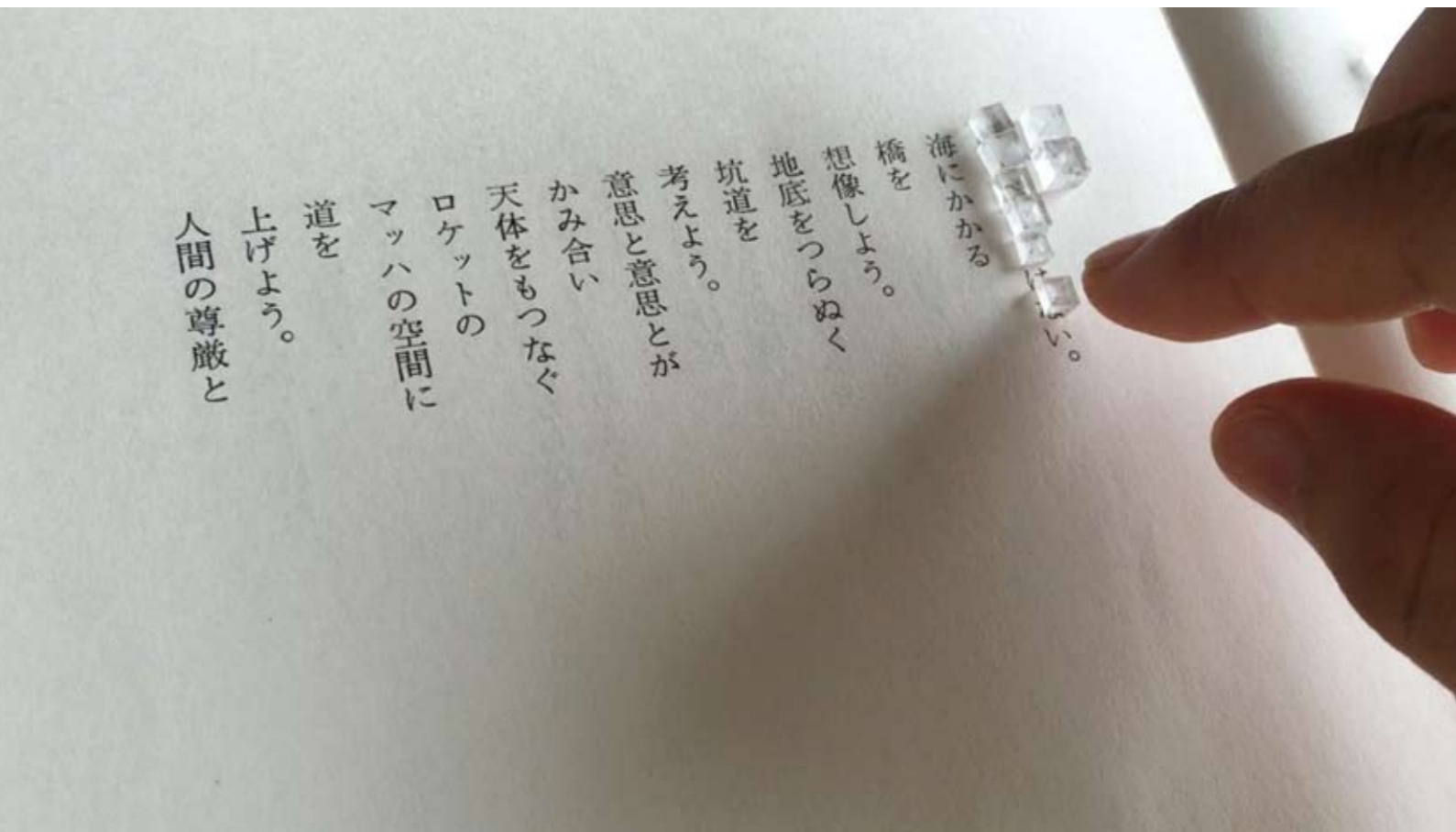
在日の詩人金時鐘(1929)が、
1970年に発表した長篇詩集「新潟」が、
半世紀の時を経て、新潟を、海を、
列島と半島の境を、現代史を照射する。

阪田清子展 対岸—循環する風景

2016/8/23(火)-10/2(日)9:00-21:00

- ◆会場:砂丘館ギャラリー(蔵)ほか ◆観覧無料
- ◆休館日:月曜日(9/19は開館)、9/20、23

主催:砂丘館(指定管理者 新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体) 後援:新潟日報社



写真/阪田清子「対岸について」(映像作品20分)長篇詩集「新潟」より(詩:金時鐘)

長篇詩集「新潟」は、在日朝鮮人の北朝鮮への「帰国事業」を日本が官民あげて支援した1950年代末より構想され、日本語による詩作が指弾され、北朝鮮への渡航が拒否された時代に書きつがれ、「発狂しなかったのが不思議だった」ほどの精神的苦境期に完成しながら、公表まで約10年を要した、複雑な構成をもつ叙事詩である。分断された祖国を隔てる国境という壁を突き抜く道を、日本という場所で、詩的想像力によって生み出そうとしたこの壮絶な試みを、帰国事業の受け入れ港であり、詩の舞台となった土地、新潟で読み解きます。

セミナー1 ま新しい潟をもとめて——いま金時鐘を新潟で読むこと

9月9日(金)19:00-20:30 細見和之(詩人・京都大学教授・大阪文学学校校長・ドイツ思想)

セミナー2 長篇詩集「新潟」と「帰国事業」の時代

9月16日(金)19:00-20:30 森沢真理(新潟日報論説編集委員長)

セミナー3 沖縄で読む「新潟」と作品が生まれるまで

9月24日(土)15:00-16:30 阪田清子 聞き手:大倉宏

セミナー4 ラウンドテーブルトーク「金時鐘の「新潟」を新潟で読む」

9月27日(火)13:30-15:30 金時鐘 + 郭炯徳(韓国語訳「新潟」翻訳者・韓国科学技術院KAIST教授)
+ 阪田清子(美術家) + 藤石貴代(新潟大学准教授・朝鮮近代文学)

- ◆セミナー会場:砂丘館 座敷・居間・茶の間 ◆参加料:1~3 ¥800・定員20名 / 4 ¥1,000・定員30名
- ◆申し込み:TEL・FAX:025-222-2676 Eメールsakyukan@bz03.plala.or.jpで砂丘館へ。FAX、Eメールでお申し込みの方は催事名、申込者氏名、電話番号、人数を併記して下さい。 ◆受付開始日:8月7日



セミナー
金時鐘の「新潟」を新潟で読む

同時開催

新潟国際情報大学／新潟日報社 連携
文化講演会 金時鐘「詩について思うこと、考えること」
2016年9月25日(日)14:30~16:00

- ◆協力:砂丘館
- ◆会場:新潟国際情報大学 新潟中央キャンパス9階講堂 新潟市中央区上大川前通7
- ◆定員:150名(先着順・入場券を送付) / 聴講無料
- ◆申し込み:往復はがき、またはEメールで住所、氏名、年齢、電話番号、「金時鐘講演会」と明記し、下記の住所・アドレスまで送る。
〒951-8068 新潟市中央区上大川前通7-1169
新潟国際情報大学中央キャンパス宛
Eメール:chuo@nuis.ac.jp
- ◆申し込み締切:9月12日(月)必着
- ◆問い合わせ:新潟国際情報大学中央キャンパス TEL 025-227-7111

砂丘館



旧日本銀行新潟支店長役宅

新潟市中央区西大畑町5218-1
TEL・FAX.025-222-2676
Eメール sakyukan@bz03.plala.or.jp

指定管理者
新潟絵屋・新潟ビルサービス特定共同企業体

新潟駅万代口より浜浦町線C2系統または
観光循環バス乗車「西大畑坂上」下車徒歩1分

※砂丘館には駐車場がありません。また、周辺の道路は駐車禁止です。公共交通機関をご利用ください。
※新潟市西堀地下駐車場をご利用の方は駐車券提示にて1時間分の無料券を差し上げます。



例えば あなたと共に生きた場所について あるいは 共に過ごした時間について 無二のそれらがなぜ不在になったのかを わたしは知りたい 例えば ひとつの中に存在する相違なるものについて あるいは かつて存在したものが密やかに喪失していくことについて それらを語るができないのは このうえもなく悲哀で残酷なこと 国家間や民族間を わたしとあなたの間を 拘束の煩悶を 小勢の隠蔽を わたしは拾い集める それらは不確かな立ち位置の集合体となり 儂くも力強く 幾通りもの答えを抱き 不在を希望へと 変えてくれる ことだろう (ステイトメントより)

日本海／東海と呼ばれる海は、大韓民国、朝鮮民主主義人民共和国、日本、ロシア連邦に囲まれている。そのせいか新潟の海岸線を歩いていると、様々な言語の漂流物が岸辺へと打ち上げられている。風が強い荒波をあちらへこちらへと漂流を続けていたのだろう、どれも傷がひどい。そのひとつを手にとり、かつての所在地だった彼方の「対岸」について想いを巡らせたのは、2013年夏のことだった。傷を指でなぞりながらあたりを見回す。それは、誰から来たのか、誰に届くのか、宛の無い無数の手紙が散乱する光景にも思えた。そして、その長く険しい漂流の道のりに想像力を傾けてみる。

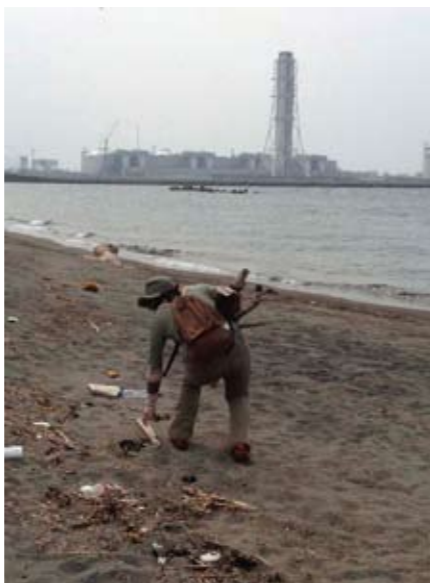
今回の展覧会の作品の一部に、敬愛する金時鐘氏の長篇詩集「新潟」を引用させて頂いている。詩の背景にある壮絶な体験を私などが全て理解することは皆無であり、浅はかな行為かもしれない。しかし、私にとって確実だったことは金時鐘氏の詩が傷という痛みとともに共同性を想起させ、言葉では表せない何かを受け取ったという感触だった。

日本海／東海を交差しながら、「こちら」と「あちら」を差し替え、見えない互いの「対岸」について想像できないだろうか。この目の前の海岸へ打ち上げられた宛の無い無数の手紙たちと、往復書簡を始めることはできないだろうか。 阪田清子

阪田清子

さかた きよこ

現代美術家。1972年新潟県生まれ。沖縄県立芸術大学大学院造形芸術研究科修了。主な展覧会に、「ニイガタ・クリエーション」新潟市美術館(2014/新潟)、「アジアをつなぐー境界を生きる女たち1984-2012」(2012/福岡アジア美術館/沖縄県立博物館・美術館/栃木県立美術館/三重県立美術館巡回展)、「VOCA展」(2010/上野の森美術館)、「沖縄プリズム1872-2008」(2008/東京国立近代美術館)、「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2006」(2006/新潟松之山エリア)など。



金時鐘

キム・シジョン

詩人。1929年釜山生まれ。済州島で育つ。48年の済州島四・三事件を経て来日。50年頃から日本語による詩作を始め、53年詩誌「デンダレ」創刊。在日朝鮮人団体の文化関係の活動に関わるが、運動の路線転換以後、批判を受け組織運動を離れ、日本語による詩作を中心に、批評、講演などの活動を続ける。詩集に『地平線』(1955/デンダレ発行所)、『日本風土記』(1957/国文社)、長篇詩集『新潟』(1970/構造社)、『光州詩片』(1983/福武書店)、『原野の詩』(1991/立風書房)、『化石の夏』(1998/海風社)、『失くした季節』(2010/藤原書店 高見順賞受賞)など。2015年四・三事件の記憶をはじめて綴った自伝的回想記『朝鮮と日本に生きる』(2015/岩波書店)で大佛次郎賞を受賞。



長篇詩集「新潟」



長篇詩集「新潟」(1970)



韓国語版(2014)

1959年に新潟から北朝鮮への「帰国事業」*第一便が出港した翌年には原稿がほぼ出来上がっていたと言われる。しかし当時詩人が属していた組織から、日本語による詩作や表現が激しい批判にさらされ、原稿の散逸や消失を恐れた詩人は小型の耐火金庫に保管していたという。出版は1970年になって実現した。全体が「雁木の歌」「海鳴りのなかを」「緯度が見える」の3部構成をとる壮大な叙事詩である。刊行の翌年詩人の高良留美子は「三千行をこえる長詩「新潟」は、日本のなかや朝鮮(韓国)のなか、また日本と世界のあいだにすでにこしらえられている道を拒みながら、別の道、まったく新しい道をつくり出そうとする苦闘にみちた作品」と評した。

*1950年代末から1980年代にかけて行なわれた在日朝鮮人とその家族の、朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)への集団的な永住帰国あるいは移住事業。新潟赤十字センターで渡航者の最終意思確認と手続きが行われた。

長篇詩集「新潟」の関連セミナーを開催します。詳細は裏面をご覧ください。

阪田清子に砂丘館で展示をしてほしいと思ったのは、2014年新潟市美術館で開催された「ニイガタ・クリエーション」という展覧会で彼女の作品を見たときだった。新潟県上越市生まれで沖縄県立芸術大学で学んだ阪田は、以後沖縄に拠点を置いて制作、発表を続けている。沖縄に行く前には新潟デザイン専門学校に学んだ時期があり、その時私は、講師として彼女が在籍するクラスを教えた。そうした個人的つながりはあったものの、それだけでなく、何か、彼女の作品に微妙に感応する自分がいたのだと思う。

「じっくりこないこと」という言葉がうかぶ。大学の卒業制作の木漏れ日に差し出された手の写真が、心に残るのは、日向でも日陰でもない場所、まだらな場所に自分はいると言っているようなその手の姿に、私自身が重なる感覚があるからかもしれない。ここでもなく、そこでもない。あるいはここでありながら、そこでもある。そのような、じっくりと定義できない、永遠にはぐれたような、はみでた場所、存在、ありよう。

「ニイガタ・クリエーション」で展示された椅子の、座面に過剰に植え込まれた脚は、椅子の脚であることをはみだし、風をはらんだまま静止したカーテンは、カーテンでありながら、カーテンであることから、はぐれようとする。

「対岸」と題された今回の展示の構想を彼女が抱いたのは、新潟の浜辺で作品の素材となる流木を拾っていて、ハンゲルが印された漂着物が多いことに気づいたときだったという。それらはまさに、それらが生み出され、使われた場所——むこうから、はみ出して、こちらにやってきたものたちだった。新潟の海は朝鮮半島の対岸という視点を獲得することで、日本海という呼称をはみ出し「東海」になる。今回の展示で阪田は東海と日本海を向かい合わせるが、その作品に引用される長篇詩集「新潟」の作者金時鐘は、その詩で「ぼくは船腹に吞まれて／日本へ釣り上げられた。／病魔にあえぐ／故郷が／いたたまれずにもどした／嘔吐物の一つとして／日本の砂に／もぐりこんだ」と書いていたように、自分の居場所から、歴史の変転によって、幾重にもはみだし、押し出され、そのはみだすこと、永遠にじっくりできない場所に詩を、言葉を生きて置いた人であった。

私は阪田に金時鐘を、「新潟」を、教えられたが、たちまちそこに、その背景を知るようになる前から、引きつけ

じっくりこないこと

られ、のめりこんだのは、おそらくそこにもまた「じっくりこない」感覚の豊穡を感じたためだった。沖縄にいて、新潟との往復を続けながら制作する阪田の表現が、皇国少年として日本の植民地下の朝鮮で育ち、終戦とともに、祖国統一の運動に関わることで祖国を追われ、日本語で詩を書くことを批判され、新潟を出港地とした「帰国船」に乗れなかった在日の詩人の言葉が、なぜ私をかくもつかむのか。それは新潟という土地が、そこに生活する私自身が、なぜか「日本」にじっくりはまらないと感じてきたからではないか。

対岸とは、つまりどちらでもなく＝どちらでもあること、ここここでない場所を揺れ続けることであり、見えにくいことではあるが、それは洪水でたえず耕地をくずされ、川を刻むことで、水を痩せさせ、港町でありながら、土砂を河口に堆積させて寄港する船を失い続け、近代化の進展とともに日本の「裏」に押しやられ、豊かな湿地を単調な田に変えつづけてきた、北陸にも、関東にも、東北にもじっくりはまらない新潟の、そこにかつて住むことを選んだ私自身の、鏡像であり、似姿でもあるからではないか。

大倉 宏(美術評論家・砂丘館館長)



阪田清子「自画像」1999年 写真 54×36cm